

法隆寺・四騎獅子狩文錦の文様と制作背景について ー中国在住ソグド人の造形表現をめぐってー

BUJACKOVA Alica (大阪大学)

法隆寺伝来の四騎獅子狩文錦(国宝、以下「本作」)は、現存する古代染織品の中で最も大きい作例の一つであり、保存状態の面でも優れた織物である。その文様には、計15窠間の連珠円文に立樹を中心軸として配置し、左右対称に天馬にまたがる四人の武人が後方に振り向き獅子を狩る図様を表している。連珠円文の間地にはパルメット副文を配する。このような文様要素は、イラン文化圏の影響を強く反映し、シルクロード各地に広く普及していたものである。

先行研究では、本作に類似する染織作例、主にアスターナ古墓から出土した騎士有髭文錦(TAM337:015/0、北京故宫博物院蔵)、騎士文錦(TAM322:22/1、新疆ウイグル自治区博物館蔵)、花樹対鹿文錦(Ast. i. 3. a. 01、ニューデリー国立博物館蔵)、連珠天馬騎士文錦(TAM77:6、新疆ウイグル自治区博物館蔵)などと比較検討が行われた。その結果、本作の中国化された文様表現や織技術の特徴から、概ね7世紀の中国(初唐)で制作されたと推定されている(西村1971、尾形2012など)。加えて、制作地の坂本和子氏は蜀(四川地域)で制作された可能性を示している(坂本2000)。

一方、近年中国北部で発掘された北朝から隋代にかけてのソグド人墓にみられる図像には、本作の文様に酷似する造形的表現が確認されているが、詳細な比較考察は課題として残っている。本発表ではこの問題に着目し、まず先行研究および染織類例の出土情報、東ユーラシアにおける織技術の伝播を確認した上で、本作の文様の再検討を行う。これまで十分に論じられてこなかった騎馬武人像の鎧形式やパルメット副文などを取り上げつつ、仏教美術および中国在住ソグド人の墓葬美術の類例と比較し、本作の文様の象徴性を明らかにするとともに、本作の制作地と年代を再考する。また、本作の制作背景において中国在住ソグド人の関わりについて検討を加える。

結論として、本作の文様は、イラン文化圏の「フウルナフ」の概念を基に、吉祥文様として構成されたものであると提示した。また、東魏北齊で花を開いた中国在住ソグド人の造形表現と多くの共通点をもつ本作は、先進的な織技術を導入していた長安の宮廷運営工房で制作された可能性が高いのではないかと発表者は考えている。本作の制作年代は七世紀初頭(隋末初唐)に遡ると推定した。